

## モリソン文庫の頃 ——鳥居坂發掘記（其一）

高 田 時 雄

石田幹之助先生の舊藏書を東洋文庫に頂戴できるというので、ここ一、二年のあいだ石田先生がその晩年を過ごされた鳥居坂のマンションに通って「發掘」に従事してきた。石田先生は病氣対策としてそれまで長く住まわれていた住居から暖房設備の完備したマンションへの轉居を決斷されたのだが<sup>(1)</sup>、どうも事情があつて引っ越しを急がれたらしく、舊宅にあった資料をやみくもにビニール袋に詰めて、それらがマンションの押し入れや戸棚に詰め込んであつた。その数おそらく數十はあつたと思われる。普段使われる書物は持ち込んだ書架に排架してあるが、古雑誌や大量の書簡などはほとんどそのビニール袋に入っていた。石田先生はたいへん几帳面な方で、手紙なども若年時代から最晩年に至るまで、大學の事務關係の通信から學會や展覽會の案内状まで全部保存してあるので、文庫のスタッフ共々選り分けるのに相當苦勞した。發掘作業は斷續的に七、八回に及んだであろうか、その結果、小文執筆時點で極めて豊富な資料が文庫に搬入され、現在鋭意整理中である。今後、そのすべてを目録化して公開しようとは考えてはいるが、當面或る程度の纏まりをもった幾つかの主題について本誌上に初歩的な報告を行っていきたい。

その第一着手として、本號では東洋文庫創立の前史ともいふべきモリソン文庫購入後の各種資料の紹介を行なおうと思う。

大正十三年（1924）十一月十九日に正式發足した東洋文庫は、實際にはモリソン文庫の購入を以て始まっていたと考えられ、石田先生御自身が「東洋文庫の生れるまで」においてその経緯を詳しく述べておられる<sup>(2)</sup>。

これは當人による記録として信據するに足るものだが、今回發掘された材料によって些か補足し得る所があれば幸いである。

大正五年（1916）七月に大學を卒業した後、當時、東京帝國大學文科大學史學研究室の副手であつた石田先生は、三菱の岩崎久彌男が購入す

ることになったモリソン文庫の引き取りのため北京に派遣されることになった。大正六年（1917）八月のことである。發掘資料の中に、この旅行の行程を記したメモが見える。

## 一、北京旅行日誌

東京下關特急（Tōkyō-Shimonoseki Special Daily Train de Luxe）の用箋を二つ折りにして、背面から正面に日を逐って出發地と到着地、及び簡単な出來事を記録する（圖一）。

いまその記事を移録すれば以下のようになる。

八月十四日（火）東京發\*

十五日夜 釜山發

十六日朝 京城通過、夕、安東（上田恭輔氏等上京スルニ會ス）  
夜、奉天ステーションホテルに泊。

十七日朝 奉天發、夜山海關

十八日（土）北京着

十九日（日）引合はせ開始

廿七日（月）引合はせ終了

廿九日（水）受渡し

卅日（木）荷造開始

九月四日（火）荷造終了

五日（水）搬出、停車場ニテ貨車に積込（美添君歸東）

七日（金）京師圖書館ニ熱河文津閣にありし四庫全書を見る（一部撮影）

清代天文臺見物（支那流なれど寫眞帖あり）

八日（土）西郊にマテオリッチ、アダムシャール、フェルビーストの墓を訪ふ。又白雲觀（道教の本山）に長春真人（邱處機——チングスカンの顧問、道士）の墓をたづぬ。なし、たゞ後世の木像を遺すのみ。轉じて法源寺を見る（北京にて創建最も古き寺の一つ）。史思明の建てし碑あり（蘇靈芝書）。

八月十四日(火) 東京着、  
 十八日(土) 北京着、  
 十九日(日) 引合はせ、  
 廿七日(月) 引合はせ、  
 廿九日(水) 引合はせ、  
 廿日(木) 荷造開始、  
 四日(火) 荷造終了、  
 五日(水) 搬出、  
 七日(金) 京師圖書館、  
 九月 八日(土) 西郊にマデアル、  
 十日(日) 自雲龍(道場)に長春東人、  
 十一日(月) 碑史機、  
 十二日(火) 荷造、  
 十三日(水) 荷造、  
 十四日(木) 荷造、  
 十五日(金) 荷造、  
 十六日(土) 荷造、  
 十七日(日) 荷造、  
 十八日(月) 荷造、  
 十九日(火) 荷造、  
 二十日(水) 荷造、  
 二十一日(木) 荷造、  
 二十二日(金) 荷造、  
 二十三日(土) 荷造、  
 二十四日(日) 荷造、  
 二十五日(月) 荷造、  
 二十六日(火) 荷造、  
 二十七日(水) 荷造、  
 二十八日(木) 荷造、  
 二十九日(金) 荷造、  
 三十日(土) 荷造、  
 三十一日(日) 荷造、

圖一a：北京日誌（一）

十三日大連着、  
 十四日大連着、  
 十五日大連着、  
 十六日大連着、  
 十七日大連着、  
 十八日大連着、  
 十九日大連着、  
 二十日大連着、  
 二十一日大連着、  
 二十二日大連着、  
 二十三日大連着、  
 二十四日大連着、  
 二十五日大連着、  
 二十六日大連着、  
 二十七日大連着、  
 二十八日大連着、  
 二十九日大連着、  
 三十日大連着、  
 三十一日大連着、  
 八月十四日(火) 東京着、  
 十八日(土) 北京着、  
 十九日(日) 引合はせ、  
 廿七日(月) 引合はせ、  
 廿九日(水) 引合はせ、  
 廿日(木) 荷造開始、  
 四日(火) 荷造終了、  
 五日(水) 搬出、  
 七日(金) 京師圖書館、  
 九月 八日(土) 西郊にマデアル、  
 十日(日) 自雲龍(道場)に長春東人、  
 十一日(月) 碑史機、  
 十二日(火) 荷造、  
 十三日(水) 荷造、  
 十四日(木) 荷造、  
 十五日(金) 荷造、  
 十六日(土) 荷造、  
 十七日(日) 荷造、  
 十八日(月) 荷造、  
 十九日(火) 荷造、  
 二十日(水) 荷造、  
 二十一日(木) 荷造、  
 二十二日(金) 荷造、  
 二十三日(土) 荷造、  
 二十四日(日) 荷造、  
 二十五日(月) 荷造、  
 二十六日(火) 荷造、  
 二十七日(水) 荷造、  
 二十八日(木) 荷造、  
 二十九日(金) 荷造、  
 三十日(土) 荷造、  
 三十一日(日) 荷造、

圖一b：北京日誌（二）

十一日（火）朝、北京發。塘沽にて船を待つ、潮加減にて遂に入らず。奉天に向け出發。

十三日（木）大連着、滿鐵圖書館觀覽。

十四日（金）旅順博物館（新設、滿、蒙、西域の發掘品を陳列す。）

十五日（土）大連發。

十六日（日）奉天を経て安東着、鴨綠江鐵橋を徒歩にて渡り、新義州一泊。

十八日（火）平壤一見（日清役古戰場、箕子陵といふもの等）、鎮南浦瞥見。

十九日（水）京城着、博物館、宮殿見物。

廿日（木）同、清涼里（東郊一里）閔妃墓を訪ふ。

廿一日\*\*（金）水原府一見、古天文臺と傳ふるものを確めんと艸を分けて漸く探し出したるも、その烽火臺址にして觀星臺と認むべき證なきを思ふ。但し烽火臺としては極めて興味多きものなり。風景頗るよし（水原は京城の南六里餘）。午後、碧蹄館古戰場を見る（京城の北西約五里）。夜出發。

廿二日（土）朝釜山着、夕下關着。

廿三日（日）夕東京着。

\*（末尾にまた次の記載あり）八、一四 朝東京發、十五日朝下關發（連絡船壹岐丸、夜釜山着、直ニ接續ノ國際列車ニ乗ル。十六日朝京城通過、夕刻安東縣通過、夜オソク奉天着、一泊。十七日朝奉天發、夜山海關通過、十八日朝北京着。

\*\*（欄外に次の注記あり）水原ハ近世朝鮮の城郭の形式を研究するに最もよきところと稱せらる。

この旅程を見ると、上に言及した「東洋文庫の生れるまで」（以下「生れるまで」として引用）に記されている日付と若干のズレのあることが分かる。いま「生れるまで」で日付が明記されているものを抜き出して、以下のような日誌との對照表を作ってみた。

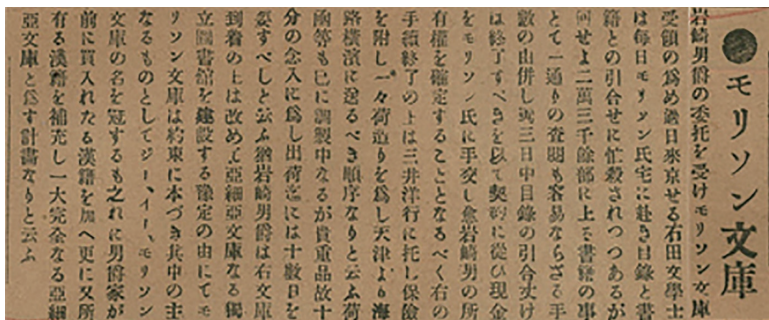
	旅行日誌	生れるまで
東京發	八月十四日	八月十五日
北京着	八月十八日	八月十九日
モリソン文庫正式授受	八月二十九日	八月二十九日
美添君歸東	九月五日	九月五日
北京發、塘沽にて船を待つ	九月十一日	九月十二日 (*)
奉天に向け出發	九月十一日	十四日午前一時半
大連着	九月十三日	九月十四日朝
下關着	九月二十二日夕	九月二十二日夕方
東京着	九月二十三日夕	九月二十三日午後八時半

(\*) (貨物列車を見送ったあと)「一度宿へ引き取った私もその後を追って……翌日の朝牧野氏などに見送られ東行の客車に投じ、單身やはり塘沽に向ひました」など前後の文章からこの日付と解釋し得る。

ゴシックにした日付は兩者一致するものの、他の日付は一日のズレがあって、旅行日誌の方が一日早い。このズレが如何にして生じたのかは不明だが、「生れるまで」執筆の際に石田先生なりの據り所があったのだろうと考えられはするが、一方で記憶違いということも否定しがたい。昭和八年に發表された『『モリソン文庫』始末記』<sup>(3)</sup>によれば、東京出發は八月十四日朝、北京着が「八月」十八日朝、文庫の正式授受が八月二十九日となっており、すべてこの日誌と一致する。やはり北京行當時に記されたこの日誌の日付のほうを信據すべきであるように思われる。

## 二、新聞記事

モリソン文庫引き取りのニュースは北京の日本人社會で大きな話題となっていたらしく、當地の日本語新聞に幾つかの報道が見られる。いま新聞の切り抜きが残されているものを幾つか紹介しよう。先ず北京の日本語紙『日刊新支那』大正六年八月二十六日の記事（圖二）。



圖二：『日刊新支那』大正六年八月二十六日

### ●モリソン文庫

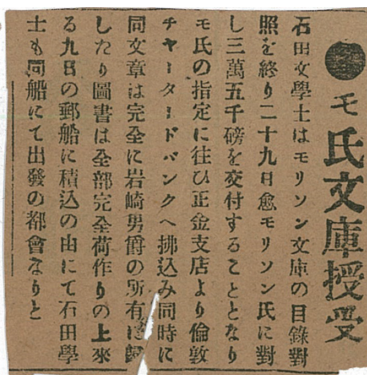
岩崎男爵の委託を受けモリソン文庫受領の爲め過日來京せる石田文學士は毎日モリソン氏宅に赴き目録と書籍との引合せに忙殺されつつあるが、何せよ二萬三千餘部に上る書籍の事として一通りの査閲も容易ならざる手数の由。併し兩三日中目録の引合文は終了すべきを以て、契約に従ひ現金をモリソン氏に手交し、愈岩崎男の所有權を確定することとなるべく、右の手續終了の上は三井洋行に托し保險を附し一々荷造りを爲し天津より海路横濱に送るべき順序なりと云ふ。荷函等も已に調製中なるが貴重品故十分の念入に爲し出荷迄には十數日を要すべしと云ふ。猶岩崎男爵は右文庫到着の上は改めて亞細亞文庫なる獨立圖書館を建設する豫定の由にて、モリソン文庫は約束に本づき其中の主なるものとしてジー、イー、モリソン文庫の名を冠するも、之れに男爵家が前に買入れたる漢籍を加へ更に又所有る漢籍を補充し、一大完全なる亞細亞文庫と爲す計畫なりと云ふ<sup>(4)</sup>。

次いで、「モ氏文庫授受」という記事で、これも『日刊新支那』による<sup>(5)</sup>報と思われる（圖三）。

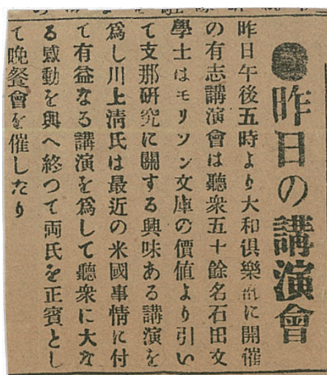
### ●モ氏文庫授受

石田文學士はモリソン文庫の目録對照を終り二十九日愈モリソン氏に對し三萬五千磅を交付することとなり、モ氏の指定に往（從）ひ正金支店より倫敦チャータードバンクへ拂込み同時に同文章（庫）は完全





圖三：モ氏文庫授受



圖四：昨日の講演會

に岩崎男爵の所有に歸したり。圖書は全部完全荷造りの上來る九日の郵船に積込の由にて石田學士も同船にて出發の都會（合）なりと。

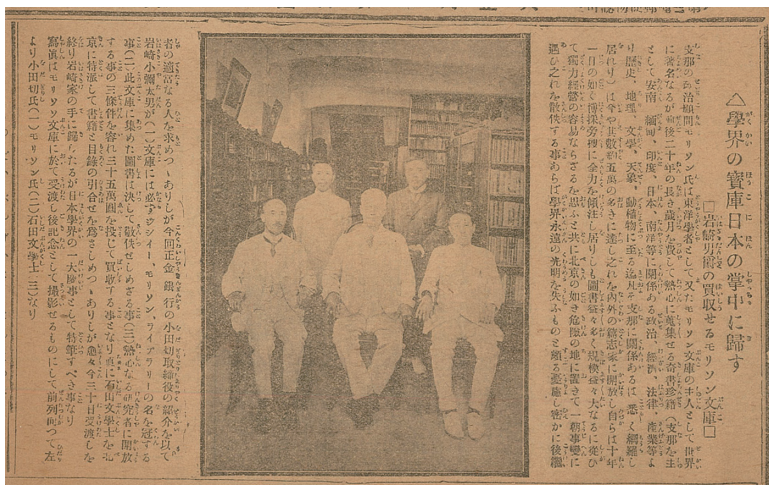
さらに「昨日の講演會」という小さな切り抜きがある（圖四）。これも『日刊新支那』と思われるが、日付は不明である。

#### ●昨日の講演會

昨日午後五時より大和俱樂部に開催の有志講演會は聴衆五十餘名、石田文學士はモリソン文庫の價值より引いて支那研究に關する興味ある講演を爲し、川上清氏は最近の米國事情に付て有益なる講演を爲して聴衆に大なる感動を與へ、終つて兩氏を正賓として晚餐會を催したり。

大和俱樂部は在北京の日本人有志によって組織され、會長は歴代公使がこれに當たり、北京に來遊する名流を招いて講演會が行われていたようで、東單牌樓三條胡同にあった。「生れるまで」にはこの講演のことは觸れられていない。おそらく石田先生が北京に到着して後、モリソン文庫引き合わせに従事していた頃のことであろう。

さらに大連の『遼東新報』にも關連記事、題して「學界の寶庫日本の掌中に歸す」が掲載されている（圖五）。日付は大正六年九月四日で、石田先生はまだ北京滯在中、しかもモリソン文庫受け渡し後に撮影した例



圖五：學界の寶庫日本の掌中に歸す

の寫眞も掲載されている。

### △學界の寶庫日本の掌中に歸す

#### □岩崎男爵の買収せるモリソン文庫□

支那の政治顧問モリソン氏は東洋學者として又たモリソン文庫の主人として世界に著名なるが、前後二十年の長き歳月を費して熱心に蒐集せる奇書珍籍（支那を主として安南、緬甸、印度、日本、南洋等に関係ある政治、經濟、法律、産業等より歴史、地理、文學、天象、動植物に至る迄凡そ支那に關係あるは悉く網羅し居れり）は今や其數約五萬の多きに達し、之れを國內外の篤志家に開放し、自らは十年一日の如く博採旁搜に全力を傾注し居りしも、圖書益々多く、規模益々大なるに従ひて獨力經營の容易ならざるを思ふと共に北京の如き危險の地に置いて一朝事變に遇ひ之れを散佚する事あらば學界永遠の光明を失ふものと頗る憂慮し密かに後繼者の適當なる人を求めつゝありしが、今回正金銀行の小田切取締役の紹介を以て岩崎小彌太男が（一）文庫には必ずジシイー、モリソン、ライブラリーの名を冠する事、（二）此文庫に集めた圖書は決して散佚せしめざる事、（三）熱心なる研究者に



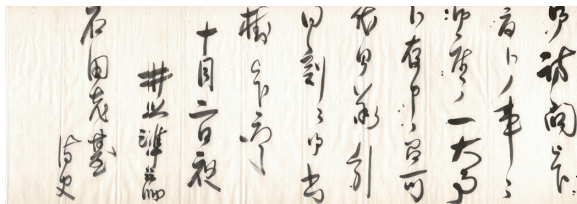
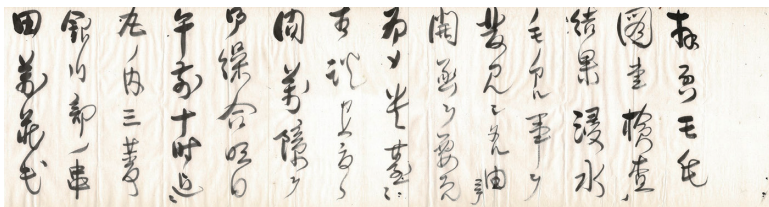
開放する事の三條件を容れ、三十五萬圓を投じて買収することとなり、直に石田文學士を北京に特派して書籍と目録の引合せをなさしめつゝ、ありしが愈々今三十日受渡しを終り岩崎家の手に歸したるが日本學界の一大慶事として特筆すべき事なり。寫眞はモリソン文庫に於て受渡し後記念として撮影せるものにして前列向って左より小田切氏（一）、モリソン氏（二）、石田文學士（三）なり。

岩崎久彌男を岩崎小彌太男と誤り、受け渡しの日も三十日に誤っているものの、譲渡條件などかなり細かく報じているところを見ると、『遼東新報』の特派員乃至契約社員が北京で石田先生に接觸して得た情報によるものと推測される。寫眞も石田先生から提供を受けたものであろう。

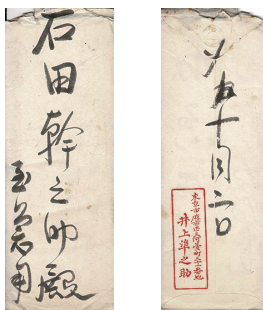
さて石田先生は、大連に寄り道をした後、奉天から安東、朝鮮の新義州、平壤、京城、水原、釜山を経て、九月二十二日の夕刻下關着、そのまま電車で搭じて東京に歸った。當時の東海道線は國府津で機關車を増結するため、一旦停車することになっていたが、そこへ當時『時事新報』の記者をしていた菊池寛がやってきて、その取材に應じるようになった。その経緯は「生れるまで」に活寫されている<sup>(6)</sup>。菊池の書いた記事は大正六年九月二十四日の『時事新報』に掲載されている。その切り抜きも石田資料中に見られるが、「生れるまで」が『東洋文庫年報』に載った際、記事の寫眞が巻頭に掲げられているので、ここには出さない<sup>(7)</sup>。

### 三、水害事件關連

さてモリソン文庫は北京から移送された後、横濱、新橋を経て一旦東京深川の三菱倉庫に搬入された<sup>(8)</sup>。ところが意外なことに、九月三十日夜半から翌十月一日の朝にかけての颱風襲來による暴風雨によって、箱詰めをした書物が水を被るという事件が出來た。この事件のことは「生れるまで」にも詳細な記述があり<sup>(9)</sup>、よく知られた事實だが、いかにも降って湧いたような大事件であった。「生れるまで」にはその圖書浸水の報知と善後處置のための緊急召集の手紙が井上準之助氏から届けられたことが記されている。今回、鳥居坂からその手紙の現物が見つかったの



圖六a：井上準之助致石田幹之助書簡



圖六b：井上準之助書簡封筒

で、ここにそれを紹介したいと思う（圖六）。

拜啓、モ氏圖書検査結果、浸水ノモノアル事ヲ發見シタル由ニテ開函  
ヲ要スル爲ニ貴臺ニ相談申上度候間、萬障ヲ御繰合、明日午前十時迄  
ニ丸ノ内三菱銀行部ノ串田萬藏氏御訪問被下度トノ事ニ御座候。一大  
事ト存申候間可然御承引、同刻ニ御出掛被下度候。

十月二日夜

井上準之助

## 石田老臺侍史

「生れるまで」には「朝早く正金銀行から小使さんが来て井上さんから  
の至急といふ手紙を一通届けて来ました」<sup>(10)</sup>とあるその手紙である。封  
筒には切手が貼ってなく、「至急用」とあることも、正しくこの手紙であ  
ることを物語っている。ただ「生れるまで」には「ところが翌朝になり  
ますと大變です」とあって、井上準之助の手紙が届けられたことになっ  
ているのだが、この「翌朝」というのが明確な日付は書かれていないも  
のの、文脈から判断する限り「二日」の朝としか読みとれない。ところが  
がこの手紙の現物には、本文に「十月二日夜」とあり、封筒裏にもはっ  
きりと「十月二日」と書かれている。とすれば手紙の届けられたのは「三  
日の朝」ということになる。先に北京出張の日誌にも日付の不確かな點  
が見られたが、ここでも同様の現象に出くわす。ひょっとすると「生れ  
るまで」の日付の一々に對してはやや注意してかかる必要があるかもし  
れない。

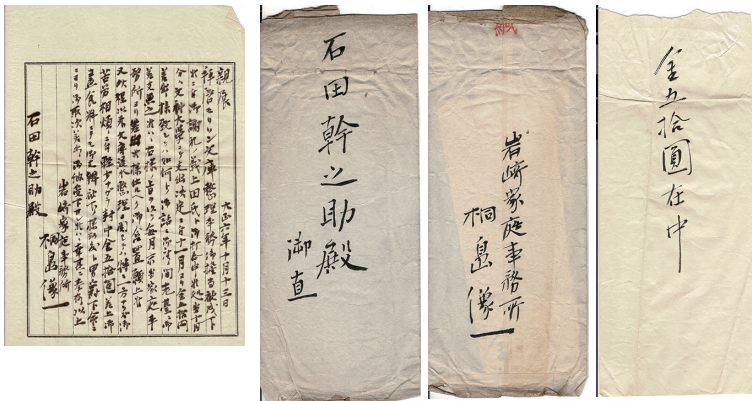
モリソン文庫の貴重な圖書が水害によって被害を蒙ったことは、文庫  
としてせつかくの出端を挫かれる一大事件ではあったが、乾燥や製本の  
やり替え、さらに損害が大きく修理し得ないようなものは、廢棄して新  
たに購入するなど、文庫を擧げての懸命な努力によって大局的には事な  
きを得たとはいえ、その際の作業や心勞は並大抵のことではなかった。  
石田先生がそのために中心となって立ち働いたことは「生れるまで」に  
詳しく述べられている<sup>(11)</sup>。

ともあれ、この奇禍をきっかけに石田先生はモリソン文庫、更には東  
洋文庫を実質的に牽引することになったわけで、その手當は岩崎家庭事  
務所から支給されることになった。こういった事柄は「生れるまで」に  
は書かれていないが、やはり関連する書簡が残されているので、ここに  
紹介しておきたい。それは當時岩崎家庭事務所長であった桐島像一氏か  
ら石田先生に宛てた以下の書信である（圖七）。

親展

大正六年十月十三日

拜啓、モリソン文庫整理事務御擔當被成下候ニ付御謝禮ノ義上田氏ト



圖七：桐島像一致石田幹之助書簡、封筒（表）、封筒（裏）、内封筒

御打合申候處、當十月分ハ文科大學ニテ支出決定ニ付、十一月ヨリ金五十圓差出候様致シテハ如何トノ御話ニ御座候間、老臺ニ御差支無之候ハ、右様ノ旨ヲ以テ毎月末當家庭事務所ヨリ差出候様仕ルヘク御含置願上候。

又此程以來文庫浸水整理ニ關シテハ特ニ一方ナラズ御苦勞相煩候ニ付輕少ナガラ封中金五十圓差上御晝食料ニテモ御支辨被下候様致度ト男爵下命ニヨリ御取次差出候、御納受下サレ候ハ、幸甚ニ奉存候、以上。

岩崎家庭事務所

桐島像一

石田幹之助殿

すなわち上田萬年文科大學長と相談の結果、十月迄は文科大學から手當が支給されるが、十一月からは岩崎家庭事務所から毎月末に五十圓が支給されること、また水害に際しての働きに對して一時金五十圓が給付される、というのである。「金五十圓在中」と記した内封筒も残っている、この手紙に封入されていたことが分かる。五十圓という金額が多いのか少ないのかは分からないが、大正七年の高等官初任俸給月額が七十圓であったことを勘案すると<sup>(12)</sup>、決して高額だったとは言えないように思われる。それと比べれば、北京出張に際して同行の美添鉉二氏と併

せ二人分の旅費を合わせて預かった千圓という金額の大きさがうかがえる<sup>(13)</sup>。

## 四、將來計畫メモ

モリソン文庫の基礎の上に本格的な研究圖書館を設立するという計畫があり、そのために新たな参考書籍の購入や建物の新築など着々と準備が進められた。大正十一年（1922）十一月には現在の駒込の地をトして工事が始められ、途中關東大震災に遭遇したものの、幸い何等の被害もなく、大正十三年（1924）十一月十九日を以て法人としての東洋文庫がスタートした。したがって大正六年のモリソン文庫購入から大正十三年の東洋文庫正式發足に至るまでの約七年の間が東洋文庫の前史たるモリソン文庫の時期となる。この期間には當路の人々の間にさまざまな議論があったと思われるが、將來計畫の策定については井上準之助、小田切萬壽之助、上田萬年、白鳥庫吉、桐島像一の五名が評議員としてその事に當たった<sup>(14)</sup>。

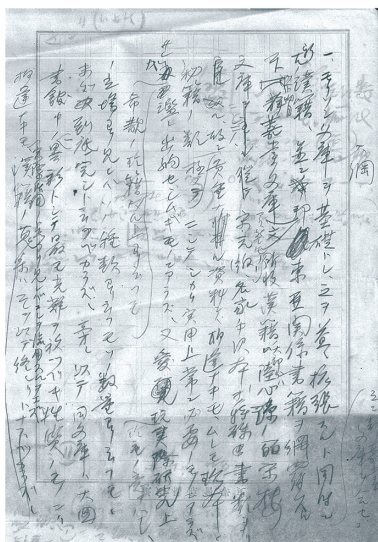
以下に紹介する資料は石田先生が書き留められた走り書きのメモに過ぎないが、東洋文庫が正式に發足する以前の蒐書原則などに言及されており興味深い。恐らくは評議員會の議論を踏まえたメモであろう（圖八）<sup>(15)</sup>。

〔一枚目〕

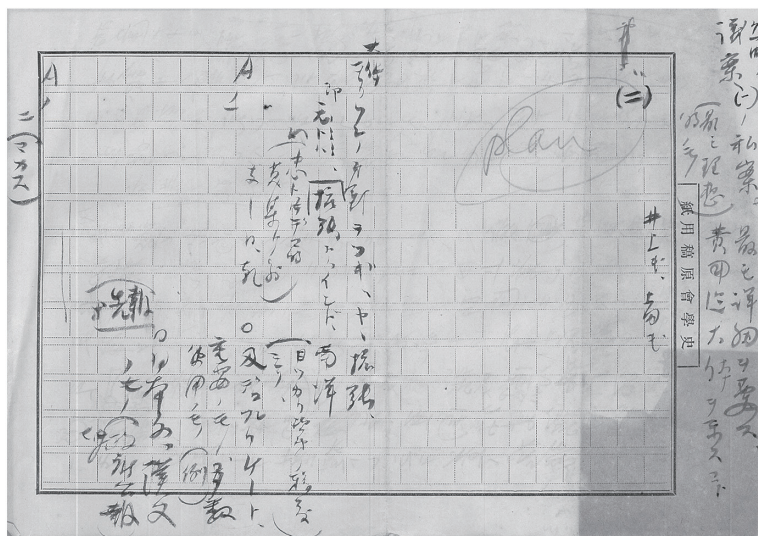
大綱

一、モリソン文庫ヲ基礎トシ、之ヲ益々擴張スルト同時ニ之ニ靜嘉堂文庫ヲ合せ、新古ノ漢籍、並ニ邦文東亞關係書籍ヲ網羅スルコト。靜嘉堂文庫所收漢籍ノ大部分ハ陸心源ノ皕宋樓文庫ニシテ、宋元版、各家手澤本等ノ特殊書籍ナリ。然ル故ニ極メテ貴重ナル資料ニハ相違ナキモ、イヅレモ珍本秘籍ノ類ニシテ、シカク實用上常ニ必要ノモノニアラズ。サレバ稀覯ノ珍籍タル上ヨリ云フモ濫ニ出納セシムベキモノニアラズ。又愛玩珍重ノ意ヲハナレ、實際研究上ノ立場ヨリ見レバ、ソノ種類ヨリ云フモ、ソノ數量ヨリ云フモ、未ダ到底完シト云フベカラズ。旁々以テ同文庫ハ大圖書館中ノ一異彩トシテ最モ光輝ヲ放ツベ

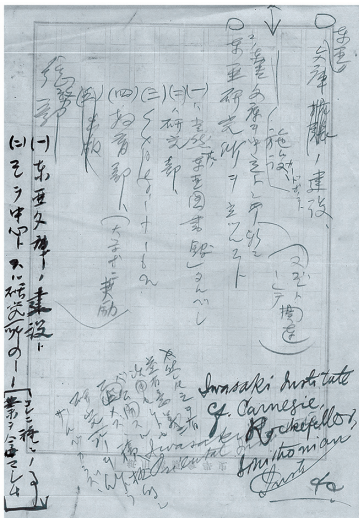




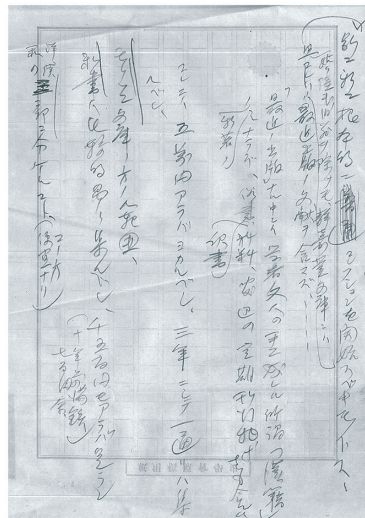
圖八-1



圖八-2



圖八-3



圖八-4

キ性質ノモノニハ相違ナキモ、實際活用ノ點ヨリ見レバ、コレヲ流用スルヲエズ、漢籍ノ蒐集ハコレヲ以テ終レリトナスベカラズ。

〔二枚目〕

第一回ノ議案（一）ノ私案。最モ詳細ヲ要ス。

（最モ理想的ノモノ）費用迄大體ヲ示スコト

井上氏、上田氏

（二） Plan

大體モリソンノ方針ヲツギ、ヤ、擴張

〔擴張トハ、インド、南洋 目ツカリ次第ノ夥敷モノ

即元トハ→中心ト片デマ的蒐集トノ別

支一日、朝

○及デュプリケート、重要ノモノ、多數使用ノモノ（例）

○日本文、漢文ノモノ（e.g. 政府公報）

〔三枚目〕

○東亞文庫ノ建設

コノ東亞文庫ヲ中立トシテ（又コレト関連シテ）新ニ

○東亞研究所ヲ立ツルコト

（一）ハ當然右ノ「東亞圖書館」タルベシ

（二）ハ研究部

（三）□□□□□□□□□□□□

（四）教育部ハ（大學等に獎勵）

（五）總務部

然レドモ之ヲ有益有意義ニ活用セントセバ公開スルニ止メズ、積極的ニ研究所ヲ作ラザルベカラズ。

Iwasaki Institute

Cf. Carnegie, Rockefeller, Smithsonian Institute etc.

（一）東亞文庫ノ建設ト

（二）コレヲ中心トスル研究所ノ建設〔コレニ種々ノ事業ヲ含マシム〕

〔四枚目〕

姑ク陸氏ノ舊藏ヲ除クモ、靜嘉堂文庫ニハ〔且コレハ〕最近出版ノ文獻ヲ含マズ、……

別ニ新ニ根本的ニコレクションを開始スベキモノトス。

「最近ノ出版」ナル中ニハ學者文人の手ニ成レル所謂「漢籍」ノ新著ノミナラズ、俗書、譯書、□料、官邊の定期刊行物等をも含ム。

コレニハ五萬圓アラバヨカルベシ、三年ニシテ一通リハ集ルベシ。

モリソン文庫ノ方ノ範圍、

新書ハ比較的易ク集ルベシ、千五百圓モアラバ足ラン（十年前滿鐵七百圓餘）

洋漢和ノ三部ニ分ケルコト（コノ方便宜ナリ）

モリソン文庫はすべて歐米言語による東洋學の書籍であつたから、日本で東洋學の圖書館乃至研究所を運營するためにはやはり漢籍の充實が不可缺であつた。その爲めに靜嘉堂文庫の利用が議論されていることが注意される。同じ岩崎家の蒐集した文庫とはいえ、岩崎彌之助が作り上げ

た静嘉堂文庫を利用することがそれほど容易に行われたものかどうかは、今日の感覚ではなかなか想像しがたい面があるが、少なくとも当時そういう議論があったことは注目してよいと思われる。

## 五、地方志の購入

いずれにせよ「實際研究上ノ立場ヨリ」見て、新たに購入すべき漢籍の緊急かつ大部のものとしては中國の地方志の充實があった。中國地方志の購入については評議員會でも議論になったらしい。以下に紹介するメモは、大正十年（1921）三月七日の日付のある「モリソン文庫評議員會會議錄Ⅰ」と標題される大學ノートに挟み込まれていたものである（圖九）。この「會議錄」そのものには大正十年三月七日（月）及び同三月二十四日（木）の議事録が書かれ、前者の評議事項は（1）ドクトル、ルー・ドキッヒ、リースニ關する件、（2）文庫新建築ニ關スル件、（3）文庫新建築敷地檢分ニ關スル件であり、後者ではモリソン文庫新築ニ關スル件（續）となっている<sup>(16)</sup>。小文ではメモのみに焦點を絞り、評議員會議事録及びその評議内容については觸れないことにする。

（一枚目）

支那地方志（縣志ヲ主トシ各省通志、府志、州志、名山、名刹、名勝志等ヲ含ム）蒐集ノ件。

拜啓本年去ル六月六日評議員會ニ於テ當文庫ニテ

一、支那地方誌ノ系統的蒐集ヲ試ムルノ必要ヲ認候ニ就テハ當日ノ御指令ニ基キ今コレガ實行ニ着手スルコトトシ、目下文求堂書店ニ在庫ノモノ並ニ近日全店ヘ到着ノモノヲ先ヅソノ核心トシテ購入シ。今後全店ヲシテ系統的ニ之ガ蒐集ニ從ハシムルモノトシテソノ計畫確立ニ資スル爲ニモ取調申候點並ニ同店ト種々交渉仕候ガソノ結果ヲ別紙ノ通り具陳仕候間、御査閲ノ上可然御決裁ノ程奉願上候。

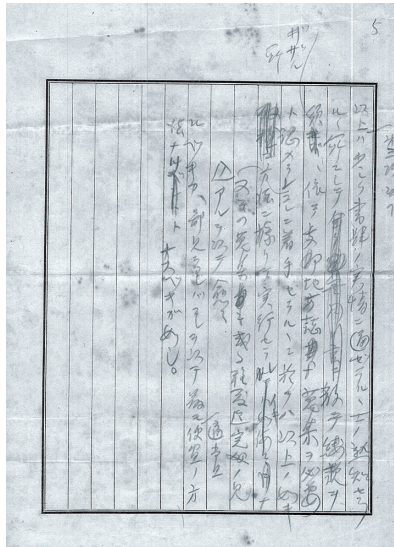
一、支那地方志ハ縣志大約九百五十部（一部平均十五冊トシテ一萬四千二百五十冊）、各省通志、府志、州志其他大約五百部（冊數全ジク七千五百冊）、合計大約千四百五十部（冊數一萬九千七百五十、即約一萬











圖九-5

五千冊)<sup>(17)</sup>ニ上ルベク而シテ目下文求堂書店ニ在庫ノモノ並ニ最近到着ノモノ約三百部（四千五百冊）ヲ計スルヲ以テ之ヲ購入スル時ハ全數ノ約五分ノ一ヲ得ルコト、ナリコノ種ノスペシャルコレクションノ基礎乃至中核トシテ決シテ貧弱ナルモノニ非ズ候。

（二枚目）

モシ右購入ノコトトナラバ、目下ノ在庫品約二百部（三千冊）ハ目錄所載定價（約三千五百圓）ノ二割引（即約二千八百圓、一冊平均九十三錢アマリ）ヲ以テ提供スベク、又最近到着ノモノ並ニ將來コノ計畫ニ基キテ文求堂ヲ通ジ蒐集購入スベキモノハ更ニ文庫側ニ有利ナル約ヲ設ケ文求堂ハ單ニ一個ノ仲介者トシテ相當ノコンミッションヲ申受クルノミニテ蒐集、鑑別、修復等ノ任ニ當リ之ヲ文庫ニ供給スベキ旨ノ申出ヲ受ケタリ。纏リタル大口ノ注文ヲ豫期シエザル圖書多數ヲ仕入ル、ニ於テハ品物ヲ寢カス惧アルヲ以テソノ一群ノ圖書ノミナラズ他ノ圖書迄カ、ル際ハ定價ヲ増ス要アリ、且ツ縣志ノ如キハ從來邦人ノ間ニ系統的ニ蒐集購入スル機關ナキヲ以テ從來ノ關係上米國議會圖

書館ヲ購入者ト想定シテ値段ヲ附シタル傾キモアリ、旁々二割ハ之ヲ差引キテ提供スベキ趣キニシテ、ナホ今後ノ便法云々ニ就キテ詳説セバ、カク計畫決定スルニ於テハ書店ニ於テ仲介者トシテ注文ノ取次ヲ引受クルノミニシテ思惑ヲ以テ仕入ヲナシ店頭ニ顧客ヲ待ツ場合トハ事情ヲ異ニシ、右ヨリ左ヘ直ニ資金

(三枚目)

ノ回收ヲナシウルヲ以テ一定ノコンミッションヲ受クルダケニテモ十分利益ヲ得タル上、購入者モ今日ノ目錄所載價格ヨリハ遙ニ低價ヲ以テ供給ヲ受クルヲ得ル次第ナリ。カ、ル約束ヲ設クル時ハ (1) 定價ノ廉ナルモノハ購入ノ價格モ從テ廉ナルヲ得。支那ニ於テモ二三流ノ書店ノ提供スルモノハ全一書ニアリテモ一流書肆ノ値段ヨリハ遙カニ低キヲ常例トス、然モ文求堂等ニ於テ一個ノ商買トシテ之ヲ顧客ニ示ス際ハ仕入價格ガ低キモノナリトテ決シテ之ヲソノ高キモノト差等ヲ設ケズ、同一價格ニ引上グルハ商人トシテ當然ノコトナレバ原價至廉ノモノモ時ニ甚シク高價トナルコトアリ。モシ叙上ノ約ニヨレバカクノ如キコトハ之ヲ免ル、ヲ得ベシ。

(2) 原價相應ニ高キモノト雖モコノ方法ニヨル時ハ通常ノ定價ヨリハ更ニ低キ價格ニテ購入スルヲ得ベシ。商品全體ノ販賣價格ヲ個々ノ商品ニ割り當ツルニ際シテ資金ノ利子ソノ他ヲ出費ヲ見込ミコレヲ加算セルハ、所得税ノ累進率ノ如ク比較的高價ノモノヲ購入シウル顧客ニ比較的餘計ニコノ原價ニ對スル利益以外ノ諸出費ヲ賦加スルヲ以テ

(四枚目)

原價ノ不廉ナルモノハソノ廉ナルモノ、販賣價格ニ對スル割合ヨリ更ニ高キ割合ヲ以テ販賣價格ヲ定ムル傾向アリ。コレ亦コノ方法ニ據レバ無用ノ失費ヲ防グコトヲウベシ。

一、カクノ如キ方法ニテ圖書ノ購入ヲ畫スルニ於テハ、仲介ノ商人ヲ設ケズ、直接人ヲ派シテ北京、上海等ニ於テソノ事ニ當ラシメテハ如何トノ説或ハ有之ルヤモ圖リ難シ。然レドモ恐ラクハ論ズル〔二〕足ラザルベシ。凡ソカ、ル計畫ノ實行ニ方リ所謂黑人筋ト經驗ナキ素人トノ直接接觸ハ利アルガ如クニテ却而失フ所多ク豐富ナル經驗ト鋭敏ナル鑑識眼ヲ具ヘ且ツ市場ノ慣習、書賈裏面ノ情偽等ニ精通セルモノ

ニ非ズンバヨクソノ任ヲ全ウスルコト能ハザルベシ。經驗ナキ尋常一様ノ圖書館員等ヲ派遣シテソノ任ニ當ラシムルモ恐ラクハ老獺ナル書賈ノ翻弄ニ委スルニ終ルベク所在ソノ實例ニ乏シカラズ、琉璃廠街頭ニ笑柄ヲ遺スガ如キハ贅スル能ハザル所ナリ。

(五枚目)

以上第三項以下ハ少シク書肆ノ實情ニ通ゼラル、士ノ熟知セラル、所ニシテ敢テ縷説ヲ須キザル所、依テ支那地方誌等蒐集ヲ必要ト認メラレ又その蒐集も或る程度迄完成ノ見込アルヲ以テ愈々コレニ着手セラル、ニ於テハ以上ノ如キ方法ニ據リテ實行セラレテハ如何ナルベキカ、鄙見ニヨレバコレヲ以テ最モ適當且便宜ノ方法ナリトナスベキが如し。

さてこのメモはといえば、「支那地方志蒐集ノ件」と題する、某氏に宛てた書簡の下書きで、「本年去ル六月六日評議員會ニ於テ」議論となった云々で始まり、「當日ノ御指令ニ基キ」地方志の系統的蒐集の實行に着手するに当たり、その業務を文求堂書店を仲介者として全面的に委託する提案で、その決裁を求める内容である。そこには漢籍輸入の實情と文求堂に委託する際の利點とが非常に詳しく述べられている。言うまでもなく文求堂は當時漢籍輸入業者として最も評價の高い書店であり、店主の田中慶太郎は漢籍の鑑定では當代に竝ぶ者のない存在であった。このメモ自體は石田先生の手になるものとはいえ、書かれてある内容はすべて文求子の主張をそのまま寫したもののようと思われる。ではこの書簡は誰に宛てられたものであろうか。これが評議員會での議論を受けているものとすれば、誰か一人に宛てたものというよりも、評議員全員に宛てて報告し承認を求めているものと理解すべきかと思われる。

いずれにせよこの提案は難なく認められ、大量の中國地方志が文求堂を通じて陸續插架されることになった。發掘資料のなかには文求堂の納品傳票のようなものも残っている。その後も文求堂は東洋文庫にとって漢籍及び中國書の最大の供給源であった。

以上、鳥居坂から發掘された資料の中から、東洋文庫にとってはその前史とも言うべきモリソン文庫時代の一次資料の幾つかを簡単に紹介し

た。百周年を迎えようとする時期にあって、搖籃期の文庫を振り返るよすがともなれば幸いである。

注

- (1) 「マンションの住み心地」『東京新聞』1966年3月11日夕刊。
- (2) もと『東洋文庫年報』の昭和三十二年度から三十五年度に四回に分けて掲載。いま便宜上、『石田幹之助著作集』第四卷「東洋文庫の生れるまで」(東京：六興出版、1986年4月) 6頁～108頁に収録のものによる。
- (3) 『セルパン』昭和8年11月號及び12月號に(一)(二)として分載。
- (4) 以下、録文には読みやすさを考慮して適宜句讀點を補った。
- (5) これは記事の部分だけを小さく切り抜いたものが残っているだけで、紙名も日付も不明だが、一行の字數(十六字)や活字など記事のスタイルから判断して『新支那』のものと判断した。もっとも北京の邦字紙としては『新支那』が唯一のものであったことを考えれば、他の選択肢はない。『新支那』はもとは週刊であったが、大正二年九月から日刊となったものという。八月二十八日か二十九日の記事であろう。また文字の誤りが間々見られるが、それらは( )内に正しい文字を補っておいた。
- (6) 「生れるまで」49頁。
- (7) 『東洋文庫年報』昭和三十四年、「東洋文庫の生れるまで」(三)。この寫眞は『石田幹之助著作集』では省略されている。また日本到着後の消息は『讀賣新聞』などの國內新聞に逐次報道され、間々「生れるまで」の記述を補い得るが、ここには觸れない。
- (8) 「生れるまで」51頁。
- (9) 「生れるまで」51～52頁。
- (10) 「生れるまで」52頁。
- (11) 「生れるまで」52～59頁。
- (12) 『物價の文化史事典』(展望社、2008年)、395頁。
- (13) 「生れるまで」21頁。
- (14) 『東洋文庫十五年史』(昭和14年11月刊)、10頁。
- (15) 圖版に見るとおり、「史學會原稿用紙」が用いられている。
- (16) 作成者は石田幹之助、末尾に「以志だ」の圓印が鈐してあることから、



正式の議事録だと判断される。

- (17) 「冊数一萬九千七百五十、即約一萬五千冊」は計算が合わず、また「即約」の數字についても不可解だが、しばらくそのままとする。